輝らっと部活DO！⑤

技術で魅了 戦隊ショー

飯田ＯＩＤＥ長姫高校（飯田市） コンピュータ制御部

ショーのクライマックスで手作りのバズーカ砲を放ち悪役を倒すテックレンジャー

「スッドーン」。隊列を組んだ8人のバズーカ砲から小麦粉と紙吹雪が舞う。大艦隊を思わせる悪役の親玉たちが倒れて退散。爆音の余韻が残る体育館は子どもらの歓声と拍手に包まれた。7月、飯田ＯＩＤＥ長姫高校（飯田市）の文化祭。同校コンピュータ制御部の生徒が扮する「高校戦隊デックレンジャー」の戦隊ショーには、2日間で約800人が訪れた。

ヒーローたちの身を包む8色の特製衣装やマスク、地球侵略をもくろむ異星人に立ち向かうための銃や剣…。その一つ一つを部員たちが手作りする。「武器も演出もかっこいい」。開場前から並んだ地元の小学6年生、中島大和君（11）が目を輝かせて言う。

ショーは2010年度、電子機械科（当時）の課題研究がきっかけで始まった。3年生が繊維強化プラスチックを素材に戦隊ヒーローのマスク製作に挑んだ。成果発表会で戦隊ショーを披露すると、校内で大受け。部活動として上演を続けられない か。指導した西村武久教諭（46）がコンピュータ制御部に目を付けた。2足歩行ロボットなどを研究していたが部員減で休眠状態。上演のため部員募集を呼び掛けると、「戦隊好き」の男子が12人も集まった。

本年度は過去最多の11人が所属。文化祭の他、公民館や農協のイベントなど年間20回ほど出演する。部員の大半は、業務の学科でものづくりが得意だ。ヒーローの1人「テックブック」を演じる機械工学科3年の熊谷雅矢さん（18）は、ショーで使う剣の柄を自ら鋳造する。砂に埋めた発泡スチロールの型に溶かしたアルミを流し込む手法を研究。中学時代は体操に熱中し、国体にも出場したが、「今はものづくりで人を喜ばせることがやりがい」と話す。

悪役に追い込まれたテックレンジャーに「頑張れ！」

ショー直前に武器のバズーカ砲にガスを注入する部員

リボンを武器に戦う女子部員のテックピンク

13年度の学校統合で女子生徒が増え、金髪の女子レンジャーも誕生した。「テックピンク」の商業科3年、下平優希さん（17）だ。出番前には設備用バイブで作ったバズーカ砲に、自ら噴射ガスも注入する。友人たちからは、すっかり「ピンク」の愛称で呼ばれるようになった。「部活の時間が一番楽しい」と照れ笑いする。

学校統合により工業系と商業系の学科が共存する高校。本年度は授業の一環で、テックレンジャーの写真を印刷したマグカップやバッグなど、ファン向けグッズの開発も進む。「人の喜ぶ顔を思い浮かべると大変な作業も苦じゃなくなる。ここではそれを体験できるんです」。舞台では悪役を任されている部長の上柳達也さん（17）＝電気電子工学科3年＝が、ヒーローの顔を見せた。

文・小松京輝
写真・中村桂吾

〈次回は石川県の日本航空高校石川「グライダー部」です〉

このシリーズは、信濃毎日新聞など各地方を代表する新聞社が連携して、時代にふさわしい紙面や事業の展開を目指す企画です。参加社は本紙と東奥日報、岩手日報、秋田魁新報、北國新聞、静岡新聞、京都新聞、山陽新聞、愛媛新聞、高知新聞、熊本日日新聞、南日本新聞の12社です。

飯田ＯＩＤＥ長姫高校　飯田工業高校と飯田長姫高校が統合し、2013年度開校。全日制6学科と定時制2学科で計940人。「ＯＩＤＥ」は、独創（Originality）、想像（Imagination）、工夫（Device）、努力（Effort）の頭文字から。

ショーを終えたテックレンジャーと握手や記念撮影を楽しむ家族連れ

サポーターひと言

悪役でも全力 えらい

南信州飯田おもしろ科学工房リーダー　三浦 宏子さん（59）

子どもたちに科学の面白さを伝える「理科実験ミュージアム」の特別講座に毎年出演してもらっている。「追っ掛け」の小学生がいたり、ファンからヒサの差し入れがあったり、地域に定着している。テックレンジャーに加わりたくて、入学を志願する中学生もいるほどだ。部員全員がショーに出演し、悪役の生徒も全力で自分の役割を果たすところがえらいと思う。公演がずっと続くように応援していきたい。